Break or Replay the School

Kman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｒｅａｋ　ｏｒ　Ｒｅｐｌａｙ　ｔｈｅ　Ｓｃｈｏｏｌ

【Ｎコード】
Ｎ２９００Ｇ

【作者名】
Ｋｍａｎ

【あらすじ】
一人の高校３年生。その高校生はただ見れば普通。でも学校では生徒会長。その高校生はある日より頭痛に悩まされる。その頭痛はとても奇妙なものだった。まるで誰かがいるかのように声が聞こえる。どこを見ても誰もいない。その声の正体は一体。そしてその声から起こる騒ぎは彼の高校生活をどんどん変えていく。彼は高校最後の一年を楽しく安全に暮らすため生徒会長を全力でやることを決意した。しかし彼の思い通りにはいかない過ぎた・・・

1騒目：予騒

ズキッ
「痛！」
・・・くそ、頭痛くて眠れやしねー・・・。
しかし気にせず布団にもぐるオレ。
ズキッ、ズキッ、ズキッ、ズキッ、ズキン、ズキンッ、ズキンッ！
「あだ！？」
ど、どんどん強くなりやがる・・・。ちくしょう、なんなんだよこの挟まれるような痛み・・・。くそ・・・、ブンブン。右左と頭を振ってみる。
「いててて・・・」
たまらず頭を両手で挟む形になった。
「これいつ直るんー」
「うはははははー！！」
「だあ！？」
な、なんだ！？なんか聞こえたぞ今。いやでもこの家には俺ひとー
「うふふふふ・・・」
ちょ！ちょ！ちょいまって！聞こえ間違いなんかじゃねえ！確かに聞こえたぞ！おいおい冗談はよしてくれよ・・・、誰かいるのか！？ひ、一人暮らしのおれを狙って盗みまくっちまうぜってか！？い、居間にいるのか？・・・止めに行くか？い、いや・・・もし刃物でも持ってたら殺されちまう。しかし大事なモンがとられる・・・いや、別に取られるもんはない。・・・それならこの部屋で黙ってたほうがいい！決定！さあ、さっさと出てけ泥！そしておれはまた布団をかぶった。
・・・カッチ、カッチ、カッチ。
あ、俺寝たのか・・・。どうしてあの状況で寝ることが出来るんだい？おれの体よ。

でももう大丈夫だろう。さっきまでいただろう奴らの気配はない。・・・なんかカッコイイな俺。ちょいと喉も渇いてきたから麦茶でも飲みに台所までいこう。部屋から出ようとドアノブに手をかけた。
「うっひゃっひゃっひゃっひゃー！！」
「うふふふふふふー！」
え！？ま、まだいるのかよ！！い、一体何をしてるんだ！？あんな楽しそうに！ま、まさか居間でちょいとピーピーな映画をみているんじゃ！ず、ずりぃ・・・！おれだって見てーよ！でもいっつも忘れちまうんだよ！気づいたら朝なんだよ！それをあいつらは人の家にズカズカと入り込み、そしてちょいとピーピーな映画を・・・！く、くそ！もう我慢できん！武器もってたって少しだけでも抵抗して映画見てやる！ち、ちくしょおおおお！！！
居間に直接つながったドアを開けた。
「・・・・・あ、あれ？」
居間には誰もいなかった。
「そ、そんなバカな・・・！？」
居間に入ればトイレや風呂、キッチン以外死角はない。おれはそこを調べてみたが誰もいなかった。それどころか最初からなにもなかったかのようにそのままだった。
「ど、どういうことだよこれ。たしかにおれ・・・ハッ！ピーピーが終わっちまう！」
急いでテレビをつけた。
朝になった。
「なんでよ！」

おれは学校に行くための準備を始めた。しかし俺の手はいつものように準備をすることが出来なかった。やはり夜のことが気になっていたからだ。
「昨日はなんだったんだろうなぁ。泥棒はいなかったし。でも声は絶対聞こえたと思ったんだがなぁ。それに頭も痛くなくなってたし・

・・」
おれはぶつぶつと独り言を呟きながら家を出た。
登校中、日課のように一人の男子がおれの肩に腕を乗せてきた。
「よ、おはよぅ習」
「ああ、滝津おはよう」
今話しかけてきたのは『滝津北』。おれの一番の暇つぶし仲間になっている。それとおれの名前は『真葉習』。高校3年で普通に学生をやっている。ただ違うといえば―・・・
キーンコーンカーンコーン
『えーこれから全校集会を始めますねー』
マイクから『魅二香』の声が聞こえてくる。副会長だ。別名『ミニカー』このとうり小学生の6年生くらいの身長だ。2年生だから後輩ってことになる。
『まず始めに生徒会長お願いしますねー』
もうなれたこの場所。全ての視線が集まるこの場所に俺は立っている。そう、おれが違うのはこの学校の生徒会長ということ。
もうかなり慣れてしまった。別に紙などを見る必要はないし、汗などもかかない。もうこれが日課のようになっているので当たり前だ。
「これで話を終わります」
『おおー』
いろいろなところから声が漏れる。そんなにすごいものだろうか。慣れてしまったおれにはわからなかった。しかし毎日のようにいろいろなことが起こるこの集会は未だに慣れない。
『えーそれでは次は校長セセーの話です。が、長いのでカットですね』
校長昇天。しそうになったところをぎりぎりでこらえた。お、校長がマイクを取ったぞ。
『なぜ・・・わしをださんのじゃ・・・』
『時間がないんですねー』

今は8時、授業にはまだ1時間以上ある。この学校は8時までの登校が決まりとなっている。そして全校集会などをやり授業にたどり着くのだ。
気がつくと校長が反論していた。
『まーだ30分以上あ、あるじゃろうがあああ！！！』
『30分しか・・・時間がないんですねー』
『も、じゃ！も！まだ時間はある！わしに話させーい！！』
校長がステージに上がっていく。あーあ、やめとけ校長。これ以上の反撃は危険だ。
『校長セセー元の位置に戻ってくださいねー。時間がないですのでねー』
「うっさいわあああああ！！！」
校長が爆発した！あんなに怒ったらカツラが・・・なっ！言ったそばからカツラが宙を舞っている！？まずい、校長はまだ隠しきれていると思い込んでいる・・・！このままではマズイ・・・！校長はハゲ関係全般に触れられると生徒全員退学にしかねない。
　この状況を何とかしようとステージ横にいるミニカーに視線を送る・・・う、おおぉおぉお！？この学校でも上位に入るであろうあの可愛い顔が鬼のようになっている！
「相当腹が立ってるんだな・・・」
っと、こんなしんみりしてる場合じゃない。今この二人を合わせれば大変なことになる・・・！俺一人、いや滝津と二人で何とかするしかない！
おれは滝津のところに手招きでこっちに来るように指示を出した。運よくこっちを見ていてくれた。すぐに滝津が向かってきた。
「どうしたんだ」
なるべく小さい声で話してくれる。ありがたい。
「見ればわかるだろう。ほら。カツラが無情にもあんなところに」
カツラはステージの階段に落ちていた。校長からはぎりぎりで見えないらしい。

「うっは、やべーやべー。でも・・・おもしれえ・・・ぶくく」
「笑ってる間にも俺たちの学校生活が終わりを迎えようとしてんだぞ。あっち」
目線をそっちにやる。
滝津も一緒に目線を一致させた。
「ああ・・・何度見てもかわいくない・・・」
「お、おい・・・あれ誰？なんかおれには鬼が見えるんだけど！？」
そのとうりです。
「いやあれはミニカーだ」
「え〝ぇー！？嘘はやめとけよ。おれはそんな、嘘にはな、嘘に・・・、う・・・そに・・・は・・・。うぁ・・・」
滝津は泣き出した。こいつもなかなかかっこいいという部類に入ってるんだがな、結構女子に人気あるし。でもそれに合わず泣き出すもんなぁ・・・。
「ほへーーーーーん！」
・・・ほへーんて。
「って！ミニカーが進軍を始めたぞ！おい、さっさと泣き止め！止めに行くぞ！おれはミニカーを止めるから、お前はカツラ救出だ！さあ出動！」
「ほげ、了解・・・ほげ」
変な声を出しながら滝津はカツラ救出に行った。
生きて帰れよ・・・。さて、おれも行かないとな。おれはミニカーの前に立ち塞がり、その小さい体を抱えあげた。抱えあげたせいでミニカーの顔が目の前にあった。
（こえーんだけど・・・）
少し声をかけてみる。
「おい魅二、まだ時間はあるんだ。そんなに急がなくて・・・え？」
ミニカーはおれの腕を意図も簡単に解いた。
結構力入れてたんだけどな。今度は後ろから抱き上げた。するり。
あれ。するり。んっ。するり。んん！？。するり。なんでだ！？お

れは最終的にかなり力を入れるようになっていた。しかし腕は簡単に解かれる。そ、そうだ滝津は！よ、よし！あっちはしっかりとやったな。・・・おいっ、やめてくれ！滝津それをこっちに持ってこおおおおおおい！！必死にジェスチャーで伝えようとする。いったい滝津がなにをしようとしているのかというと、それはもう恐ろしいこと。ジェンガの一番下のラスト一本を瞬間的に抜けば大丈夫！とかそういうレベルを超えたことをしているのだ。滝津は・・・、カツラを校長の頭に再び被せようとしているのだ！・・・こ、これどうすりゃいいんだ！そのうちにもミニカーは前進している。おれはその体に思い切りしがみつく。と、とまらねえ！すると滝津がこちらに合図を送っている。

『いつもの・・・あれ？』

「ぶっ！」

あ、あれだけはやりたくないからこんなに必死になってるんでしょうが！でも止まらない！まったく止まらない！まるで機械だ！しかしこれを止める方法は一つだけ。

アレだ。

これはしょうがないことだ。

学校のため。

生徒のためだ！

「よし！」

おれは覚悟を決め。ミニカーを抱きしめ、耳元に口を近づけ、そして・・・

「香、大好きだ・・・、愛してる・・・」

思いっきり甘い声で言ってやった・・・。

「か、会長・・・！」

そしておれが抱きしめているので体をモジモジさせている。普段のミニカーに戻ったようだ。
「そろそろはなしてください・・・ねー・・・。はずかしぃ・・・・です・・・ね」
「あ、ああ、すまなかったな」
『ヒュー！熱いねぇ～！ピーピー！』
これが一番辛い・・・。
そしてこの件は一件落着。していない！忘れてた、カツラ！ってあれ？校長の頭がふさふさに。そして、後ろから「ふっふっふ」と変な笑い声。
「俺をなめてもらっちゃ困るよ。おれは一応バスケで鍛えたこの俊敏性であんなこと軽く出来てしまうのさ。ふふ、ふふふふふ。決まった」
「そうか、よかったな」
そして校長の話は終わったらしい。校長は満足げにもっどてきた。
「一件落着か・・・」
ため息一つ。
「お疲れ様です。校長先生」
「うむ。君もしっかり出来ていたな。これからも頑張りたまえ」
校長・・・カツラやめて・・・・！
『えーとではこれで全校集会を終わります。では自由に帰ってくださーいねー。・・・むひゅひゅ』
なんかへんなものを聞いた気がするが、なんとか一日の始まりを終えることが出来た。
みんなが自分のクラスに帰っている中滝津はまだなにか言っている。放っておこう。ミニカーは体をくねくね、顔が真っ赤になっている。何を考えているのやら。
生徒達は朝からいいものが見れたと満足そうだった。見せ物かよ・・・。でもそれでこの学校はいい感じで不良なども出ないのだ。そこらへんの学校よりは全然いいだろう。

変なことばかりだがこれがこの学校なのだ。この一年を最高のものにしてやるさ。おれの力で。
さあ授業が始まる、クラスに行こう。
一日の続きだ。
・・・・・・
・・・体育館の入り口は早く帰ろうとした生徒で詰まっていた。
「なにしてんだか・・・はあ。みんな落ち着いて行動してく―」

ズキリッ

「うはははは」
「うふふふ」
「「もうすこし」」

1騒目：予騒（後書き）

もうドタバタいそがしストーリーです。
これから温かい目で見ていただけると嬉しいです

2騒目：謝騒（前書き）

ある日より頭痛が始まった真葉習は魅二華と校長の騒動もあったがなんとか全校集会をおえることが出来た。そしてその後にまた頭痛が発生するが・・・

2騒目：謝騒

「えーこれで朝のホームルームを終わります。委員長号令をお願いします。」
「はい、起立、きょーつけ、・・・すちゃ。」
委員長は一人座った。クラスの全員が委員長を見ている。しかし委員長の頭は机に沈んだ。
いつもだがなにしてるんだか・・・。
「・・・おい委員長、礼してないぞ。あと着席も。」
おれが委員長に小声で囁いてやる。
「なにが？てかなんでみんな立ってんの？座っちゃいなよ。あ、みんな立っていたい族だったんだね、ごーめんごめん気づかなかったよ。じゃ、ぼくそんな族じゃないから寝るね。みんなと違ってぼくは人間だか―」
「「「「ボケが長ーーーーーーーい！！！！」」」」
クラスの全員がつっこんだ。そして委員長にみんなはいろいろ言っている。
「早く座らせてよぉー」「俺はやくトイレ行きたいんだって！」「ていうか委員長天然ー？かわいー」「でももうちょっとボケは短くして、ちょっと疲れちゃうよ。ははは。」「でもやっぱり委員長いいキャラしてるよ、おもしろいね。」「でもさっきのつっこみはすごかったな。」「うんうん、みんなでワーッとね。―」
「わっはっはっはっは。みんなおもしろいなぁ。」
みんなはもうすっかり気にしていないようだ。ほんとに今日は朝から愉快だな。
「ほんとうちの委員長は面白い奴だなー。」
いつのまにかおれの隣にいた滝津が言ってきた。
「そうだな。なんか周りとは違う感じだな。」
「うーむ・・・、しかしあいつもなかなかかわいいよなぁ。この学

校でかなりのもんだろ。あの天然キャラであの顔はやばいな。ぶつぶつ・・・。」
また始まった・・・。
でも確かに委員長が可愛いのは認める。外見で目立つところといえば、すっと腰あたりまで伸びた真っ白な髪。その髪の毛に枝毛などはまったくなく、風になびかれれば綺麗に広がっている。ほんとに雪のような髪だが、彼女は遺伝と言っていた。しかし親などのことはなにも教えてくれなかった。しかしなにも気にしないことにした。髪以外にはちょっと子供じみた顔がかわいらしい。身長は１６０ｃｍくらいだった気がする。それで結構なグラマーなのだから文句はないだろう。かなり狙っている男子は多いらしい。そりゃそうだ、こんな可愛い子が彼女だったら全てを捧げてしまいそうだ。
そのなかなかの美人と言われる委員長の名前は『軌道（きどう）　見照（みてる）』
俺の変わりに委員長をやってくれている。気を使ってくれたらしい。すごくありがたい。と、そのとき。
「おーい生徒会長君。これ、風邪調べ。やっとけって言ってたよね。おわったよぃ。んじゃ」
プリントの束が机にドスンと音をたてて置かれた。見照はしっかり仕事をしてくれたようだ。ほんとにいい子だということだ。おれは机にプリントをしまうときに見照の方をちらっと見てみた。見照は足を止めてこっちを向いて言った。
「集会、ナイス。お疲れさま」
見照はすぐに席についた。
ああいう気遣いをしてくれるところがいいところだよな。
おれは静かに呟いた。
「・・・お前もナイスだぞ。ふぅ・・・・っ！―」
ズキンッ！
「う、あ・・・！」
ズキズキズキ！
「くっ！い、痛てぇ・・！」

でも声は出しちゃいけない。あんなにみんなが楽しくしているのにおれが水を差すわけにはいかない・・・・！
・・・でも、痛てぇ・・・・！
キーンコーンカーンコーン・・・・。
授業が始まった。この痛みがすっと続くならこの時間は地獄になるだろう。委員長の見照は号令をかける。今度はしっかりしている。でも今はそうしてもらわないと困る。痛みはどんどん増していく。いつのまにかおれは机と腕に頭を挟まれていた。
（痛い・・・！痛い・・・！痛い・・・！）
おれの異変に気づいたのか教師が寄ってきた。
「大丈夫ですか、真葉君。具合が悪そうですよ。保健室に行きますか？」
だめだ・・！ここで我慢しなきゃ！
「い、いえ大丈夫です。僕の気にせず授業を続けてください。」
「わ、わかりました。辛かったら言ってくださいね。誰かと一緒に保健室に言ってもらいますからね。」
「はい、わかりました」
なんとか切り抜けた・・・。え、見照がずっとこっちを・・・。しかしすぐに見照は前に向き直った。
（き、気づかれたか？）
ズキン！
くっ！うぅ・・・。
・・・・・
・・・・
・・・
キーンコーンカーンコーン・・・。
な、なんとか耐えることが出来た。
次はそんなに当てられることのない授業だ。安心していられるだ―
「ねえ生徒会長君？」
えっ・・・。どうしたんだいったい・・・。なんでいきなり見照が

？やっぱり気づいていた？いやこういうときこそ平常心を保って・・・。
「どうしたんだ見照。」
「生徒会長君なんか無理してるっしょ。」
「え？おれはいつも通りだぞ？」
ズキン！
くっ・・・！
まずい・・・
「えーそうかなー。なんか顔色悪いと思うんだけどなあ。気のせい？」
「ああ気のせいだろ。この通りぴんぴんしてる。」
ズキンッ！
うくぅ！
「そっか。なら心配ないね。ごめんねーおせっかいでしたー。」
そう言うとすぐに席に戻る。
すぐにおれは頭を机と腕に挟めた。
「ほら、やっぱりなんか無理してるんだ。」
な・・・！
「み、見照別に俺は無理はしてないって・・・」
「嘘言っちゃだめだよ。生徒会長君は学校で寝たりなんてしないもん。いつもみんなのこと見てるからね。」
こいつは俺の行動をしっかりと・・・。しょうがないこいつになら別に言ってもいいだろう。
「ああ、ちょっと頭が痛くてな。ちょっと休んでたとこ―って・・・ちょ！」
「保健室行こう生徒会長君」
見照は無理やり俺の腕を引っ張り上げて体を起こし保健室まで引っ張っていこうとしていた。
「・・・だめだよ！よいしょっと。ちゃーんと・・・！言わないと・・・！心配するでしょ・・・！」

「だ、大丈夫だって！こんなの教室で休んでればすぐに―」
「ダメーーーーー！！」
廊下まで引っ張られていた俺の周りの生徒は目を丸くしていた。かなり響いていただろう。
「頭痛はほっといたらもしかしたら死んじゃうかもなんだからちゃんと休まないと！」
見照はじっと俺の目を見て訴えかける。こんなに真剣な見照は見たことがない。・・・しょうがない。
「わかったよ。わかったからゆっくりいこう。頭に響くよ。」
「わかってくれたんならよろしいよ」
それから激しい頭痛とともに保健室に入った。
ベットがあったので休ませてもらうことにする。
「見照ありがとな。」
「えー？なにがー？」
「いや今のことさ。ほんとに心配してくれただろ。それのことさ。」
「ああーあたりまえっしょ、生徒会長君はいつも頑張ってるんだからさ、すこーしお休みだよ。」
「ありがとうな。」
「いえいえー、じゃあ私はゆっくり授業に戻りますかね。」
「ああ、しっかりな。」
「もちろんだよ、生徒会長君。お大事にー。」
「おう。」
帰り際に
「生徒会長君、一人で保健室に来たって言っておいてね。あと先生には私から言っとくからー。ではー」
バタンッ・・・
「ふう・・・」
また一騒動終わったのか・・・。今回は俺が原因か・・・。
それにしてもだいぶ頭痛はやんだのだろうか。それなら見照のおかげだな。さっきまでのことを少し思い出しながらおれはゆっくりと

目を閉じる。あとは暗い世界のみだった。
そして意識は沈んでいった・・・。
・・・・・・
・・・・・・
・・・
寒い。風だ・・・。
気づけばもう暗くなっていた。
「学校終わっちまってたか・・・。急がないと警備員に見つかっちまうな」
おれは空いていた窓を閉め急いで帰ることにした。
でも誰も保健室に居なかったんだろうか・・。まあしょうがない。
おれは小走りになっていた。

帰れば一人。
ゆっくりと眠ることが出来る。
夜ご飯も食べずにおれは制服のままベッドに潜り込んだ。さっき寝ていたが走ったせいか眠気は覚めていなかった。再び俺の意識は闇に沈む。
が、おれはまた聞いた。
あの悪魔のような笑い声を・・・

「うはははははー！あっとすっこし！あっとすっこし！」
「そうですよーがんばってください。うふふふふ」
おれは聞き間違いなんかではないと再認識した・・・。

2騒目：謝騒（後書き）

あんまりこのストーリーにキャラは多数登場しないので今回はキャラを知ってもらうためのシナリオにしました。もうちょいで本番がやってきます。その本番を楽しませられるよう頑張ります。

3騒目：始騒

「うっ・・・、く！うぅ！あ、頭がぁああ！！・・・痛いぃ！」
今日という朝はなんとも不快だった。―ズキンッ！
「まっ！まだ、起きたばかりだってーのに・・・、くぅ・・・！」
俺は朝から頭痛にやられていた。いつもの頭痛ならなんとか歩けるまではいったもののレベルが違った。例えれば思いっきり誰かに頭をぶん殴られたときのような感覚だ。そんなもんが何度も何度も続く。痛みが来るたびに俺は頭を両手で鷲掴みにする。これが一番楽になる手なのだ。
今は６時。そろそろ準備をしなければいけない。しかしどうしても終わることのないこの頭痛が俺を動かそうとしなかった。
ズキンッ！ズキンッ、ズキン、ズキ・・・・

「と、止まった？よかった・・・―っ！」

ズガンッ！！

俺はなぜ倒れているのかもわからないまま倒れこんだ。

「しぶとぉい」
「まああと少しでしょう」

・・・・・
・・・・・
・・・・

目が覚めたとき、時間は７時５０分だった。

「や、やばい！集会が・・・！」
急いで支度する。いつもは食べている朝ごはんも、いつもはセットしている髪の毛も気にせず、学校へ向かった。
間に合った・・・。生徒達はすでに体育館への移動を開始していた。
俺はなんとか自分の定位置に着くことが出来た。

そして始まった。全校集会。

『はい、それではー全校集会を始めますねー。生徒会長ーお願いしますねー。』
ミニカーのコールのあと俺はいつも通りステージの真ん中に向かった。
いつもやるもの。日常だ。もうなにも気にすることはない。
俺はいつものようにステージの真ん中に立ちれいをした。こんなものは普段の出来事などをしゃべればよい、それで終わる。
おれは話し始めた。1分・・・2分・・・3分・・・あ、あれ・・・話が続かない。いつもなら5分は普通なのに。なんでだ？日常が思い出せない・・・。みんなの顔・・・学校の形・・・通学路・・・、おもい・・・だせない・・・。

なにもかもが俺の頭の中から吹っ飛んだ。

そして最後の頭痛がやってきた。

ズガンッ！！ズガンッ！！ズガンッ！！ズガンッ！！！
「が！！？う、あぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！あ、頭が・・・！頭がぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
俺は思い切り横に倒れた。体育館は静まり返っていた。それは焦り。不安などからの静寂だった。しかし俺の声だけは体育館を反響する。

ズガンッ！！！ズガンッ！！！ズガンッ！！！ズガンッ！！！！
「かっ・・・！ぁ・・・、いてぇ・・・」

「じゃあラスト思いっきりやっちゃうよー！」
「やってしまいなさい！」

「「せーの！！！」」

ズギャンッ！！！！！！

俺は全身の脱力を感じた。これが死ぬ、ということなんだろうか。
それなら死というものはあっけないものなんだなというのがわかる。
俺は目を開けていることも出来ず、目を閉じた。これで永遠に覚めることのないだろう目を。しかし、すぐに体に力が入るのを感じた。

え・・・？

「お疲れ様ー。うははは。だいぶ疲れちゃってたみたいじゃん？やっぱり痛かった？そりゃ痛いよねー！自分の頭砕かれたんだからぁ。でもよく耐えたと思うよ、うはは。」

え・・・？？
お、女の子が二人俺を見下ろしている。
「そうですね、普通ならすぐに私たちは出ることが出来るはずだったのですが。あなたの意思が強すぎてなかなか時間がかかってしまいました。疲れたでしょうけどもう大丈夫のはずです。私が再生とともに回復させておきましたから」

「これからあんたは私の暇つぶしのオモチャになるんだから、光栄に思いなさいな。うはは」
意味がわからないんだ。この状況はどうやって対処するのか。まったくわからないんだ。
俺がやるべきことといえば・・・
無視だ無視。
考えた末、俺はまずは全校集会を終わらせることにした。当たり前だ。
『これで話を終わります』
俺はステージを降りようとしたとき―
『ちょっとストーップ。あんた達に言いたいことがあるわー、聞いきなさいな。・・・じゃあ、せーので言うよ。練習した通りに。わかった？』
『ええ・・・わかったわ』

二人の女の子はすぅーと息を吸い込むと言った。

『『私たちはこの学校を・・・』』『破壊する！』『再生します』
『以上！』
そういうと二人とも姿を消した。
みんなが唖然としている。当たり前だろう。
俺だってしてるというより何を言ってやがるあいつらは。学校を破壊する？再生する？
い、意味がわからない。こ、これは夢なのか？こんなのが現実だなんて・・・ありえない！
おれはすぐにステージを降りた。
『あ、で、ではー次はー校長セセーのお話ですねー』
そして校長の話が終わり集会は終わった。

心配されたのか、今日俺は、学校生活初めて早退させられた。
何者かもわからないあの二人。一体何なんだ・・・。
おれはベッドの上でひたすら考えていた。

「あいつらはいったい・・・なんなん―」
「え？悪魔だよ？」
へ？
「う、うおわあ！」
俺は驚きのあまりベッドから転げ落ちた。
「な、なんでお前らがここにいる！てかいつからいた！」
「えー？当たり前じゃんあんたが家なんだから。それにずっといたよ」
「俺が家！？どういうことだ」
「んーやっぱり私人間苦手ー、うるさいー、ルイ姉頼んだっ。」
「しょうがないですね。私たちは魔界から来た悪魔です。その悪魔は人の体に住み着くことでこの世界に存在することが出来るのです。ですからあなたの体がその役目になっているということです。」
「な、なんとか理解はしようとしているが・・・まてまて、体にいるときはお前らはどうなってるんだ？まさかそのまんま入ってくるんじゃ・・・」
「うふふ、そんなことはしませんよ。私たちは体の形状を変化させることが出来ます。ですのであなたの体に入るときはこの地球上最小の生き物になっています。」
「そ、そんなやつらが俺の体の中に・・・―！じゃ、じゃああの頭痛はお前らの仕業か！」
「そうです。私たちは殻から出てくるひよこのように頭を割って出てくるしかありません。」
「そ、そんなバカな・・・！それじゃあ俺はとっくに死んでるんじゃ！」

「いえ、その心配はいりません。そのために私がいます。」
「どういうことだ？」
「私は再生の力を宿しています。そしてこっちの子は破壊の力を宿しているので、こっちの子が破壊した瞬間に私は破壊された場所を再生したのです。お分かりになられましたか？」
「じゃ、じゃあなんだ！？おれの頭ん中は何度も割られてたのか！？そして再生元通りってか！・・・信じられねー。」
「それもそうでしょう。しかしそれは事実です。だから私たちがここに立っています。それはご理解ください。それに私たちはあなたに危害は加えませんのでご安心を。」
「む、むう・・・じゃあお前らの力を見せてみろよ。そ、そうしたら信じてやる。」
お、おれは一体何を言ってるんだ・・・！何をするかわからないやつらに。もしかしたら殺されるかもしれないんだぞ。しかしこれ以外に信じられる行動はないだろう。いや、もう何を考え―
「ではあなたをこの子が殺しますので。それを私が再生します。ではやりましょうか。サン、頼みますよ。」
え！？
「りょーかーい。じゃあ死になさいな！」
「い、いやいや！ちょいまてちょいまて！なんで殺しますってなるんだよ！なんか物壊すとかでもいいだろ！」
「なにようっさいわなぁ。」
「ああ、そうれもそうですね。でも私たちは悪魔なので。実際にそのあたりを感じてもらえればよろしいかと。」
「ねえルイ姉ぇ？もうやっていい？はやくコナゴナにしちゃいたいんだけど。」
こなごな・・・コナゴナ・・・粉々・・・粉々！？
「ちょっ！どうする気なんだよ！粉々って・・・―いっ！？」
少女の手にはその小さい体には不釣合いな物が握られていた。めっちゃくちゃでかいハンマーだ。あんなの思いっきり振り回されてあ

たったら粉々じゃすまないぞ！
「さあ、やってくださいサン。」
「りょーかーい、。今度こそやるから。もうなんにも聞かなぁい。」
「わ！おい！待てって！落ち着けよ、おい！―なっ」
「じゃぁーブレイク！」
ぶおん！
ボグリュ！
思い切り振りかぶられたハンマーは俺を簡単に潰した。
「あ、粉々に出来なかった！ショック！」
「まあ見事に潰しましたね。さっさと生き返らせないとうるさそうですね。・・・では。リプレイ」
俺は再生した。
「どうどう？信じる気になったー？まあ信じるも信じないも私たちは悪魔なんだけどな！うはは！。」
俺は放心状態だった。
・・・さっきハンマーが俺の頭に直撃して世界が曲がった。そして俺は死んだのか・・・。そして俺は再生された・・・。こ、こんなもん信用するしかないだろ・・・！
「ご気分はどうでしょう。再生は完璧のはずですが。」
「ああ、なんともない。ちょっと気分が悪いだけだ。」
「そうですか。それで、信じる気になりましたか？」
「ああ・・・信じる。お前らは悪魔・・・なんだな。ほんとに。」
「そうだって。私たちは悪魔！」
「信じてもらえてよかったです。」
なんてこった・・・。でも普段は危害を加えないといっていた。なら少しだけでも信用してやってもいいだろう。
「そ、そういやあんた達の名前はなんていうんだ。ルイとかサンとか言ってたが。」
「はい、私の名はギランティス・ルイバテュン。ルイとお呼びください。ほらあなたも自己紹介しなさい。」

このルイ姉と呼ばれていた女の子は少し大人っぽい感じがする。女の子というより女性だ。真っ黒な髪の毛が膝辺りまでのびている。綺麗な髪だ。顔立ちはちょっと整いすぎているというほどのものだ。まるでどこかの国の人形のようだ。しかし普段は目を開けているかわからないほど細めている。彼女は明るいのが苦手だからーと言っている。

「わかった。私の名はギランティス・サンバテュン。サン様でいいわ。んで？あなたは？」

このちっこいのはミニカーと同じくらいの身長で、ぼさぼさと広がった薄い赤色をした髪の毛をもっている。ルイとは違い明るいのは大丈夫らしい。顔はとても子供っぽい。一体何歳なんだろう・・・。

「あ、ああ俺は真葉習っていう。よろしく。ってかサン様なんて呼ばないぞ。」

よろしく、っておれは・・・。

「では私は真葉様と呼ばせてもらいます。」

「じゃぁ私はー、・・・下僕。」

「なんでだよっ」

「えー？人間だもんあったり前じゃん。」

「何言ってやがる！人間は悪魔より劣ってなんかねーぞ！」

「へーんだ。じゃあ習でいいわよ。はい習習習習習習。これでいいでしょ。」

「っこんの・・・！・・・まあいいよ。はぁ。」

大分疲れた・・・。

「はぁ、なんか疲れちゃったよ。ルイ姉ーちょっと休んでもいい？」

「そうですね、ちょっと最近は動きっぱなしでしたからね。そろそろ休んだほうがいいかもしれません。では真葉様、お体失礼します。」

「あ、そうだ、一体どうやって体に入るんだ？」

「まあ見てて。ほっ」

ポンッ

「あ、あれ？サンは？」
「あの子はもうあなたの体の中にいるでしょう。」
「え、もういるのか。あ、小さくなるんだったっけか。どこにいるんだ？」
「頭の中です。」
「そ、そうか。じゃあお前も頭にいくのか？」
「そうですね。もう決まってますので。」
「へえ～。まさかとは思うがお前らの声とか聞こえないよな？」
「いえ。声の大きさは小さくはなりますが聞こえるでしょう。」
「ストップストーップ。何言ってんだよ。それじゃあ俺ずっとお前らの声聞いてないといけないじゃねえか。」
「それはしょうがありません。休むとき意外は外に出ますので。それにもう学校には手続きはしてあります。明日からは私たちも学校へ行くので大丈夫でしょう。」
「そうか・・・ってなに！？学校にいくだと！？マジか！」
「ええ、そうですよ。」
「ああ・・・なんでこうなるんだよ。」
「それでは私も力を使いすぎました。これにて失礼します。では。」
ポンッ
あぁ・・・俺の中に入ったのか。変な感じだ・・・。俺の中に二人の悪魔がすんでいる・・・。そして明日からその悪魔達と学校・・・。うわぁ・・・なんてことだ・・・・。

かすかに寝息が聞こえる。あいつらのだ
「ほんとに聞こえるし・・・。」

俺も寝よう・・・。ほんとに疲れた。
俺はベッドに倒れこんだ。

3騒目：始騒（後書き）

とうとう始まりました。これからどんどん発展していくのでお楽しみを～

4騒目：理騒

朝・・・だな。
俺は5時に起きた。いつも通り。
しかしいつもと違うのは俺の頭がものすごく重く感じること。原因はこれだ。

「ごがぁー！ごがぁー！・・・うは、うはは・・・。ごーがー！」
「くすくすくすくすくす・・・」

うるさすぎる！隣で工事でもしてるようなもんだ！
てかくすくすって・・・。
なぜかというのも俺の頭の中にいる二人組みの悪魔は体は小さくなっても声はさほど変わらないのだ。ちょこっと変わったとしても直接脳に響く。寝始めは可愛いものだったが時間が経つとすぐにこれだ。寝ていても疲れはたまる。
しかしいつもの頭痛がないだけで大分楽だった。
「お前らのせいなんだが・・・おりゃ。」
おれは頭を左右に振ってみた。
「・・・お？静かになったぞ？どれもう一発。ていっ。」

「うわぁあ！？な、なんだ？地震か！？」
「真葉震でしょう・・・。ふぅ・・・」
「あ、そうだった。ここあいつの―うわっ！」

ぶんぶんぶんぶんぶんぶん！
俺は頭を振って振って振りまくる。

「このやろぉ、黙ってれば調子に乗りやがってぇ！ルイ姉、ちょっ

と行ってくる！・・・ルイ姉？おーいルーイ姉ぇー。うっわぁ、ここでもこんなに寝れるんだ・・・いつもだけどほんとよくこんなに眠れるよな。不思議・・・。まあいいや私だけで行ってやるもんね。」

「おーいサン。さっきから丸聞こえなんだけどー？」
俺は頭と会話を開始した・・・！そして頭から返事が帰ってくる。
不気味だ・・・
「うわ！盗み聞きしてたのか！サイテーだなお前！サイテーだ！」
「なに言ってんだ。お前らが勝手に入ってきたくせに。文句言うならこうしてやる・・・おりゃ！」
ぶんぶんぶんぶん！
「うわあぁあ！や、やめろよぉ！気持ち悪くなってきただろ！やめろってばぁ！」
「やめてくださいだろ！どりゃ！」
ぶおん！ぶおん！ぶおん！
さらに大きく俺は頭を振り回した。
「きゃぁ！そ、そんなこと言うわけないでしょ、バーカ！バカ人間！バカ下僕ー！」
「ふっ、その強情さを後悔するんだな。でりゃあぁあああ！！」
俺は上下左右前後全ての方向に頭を振りまくった。
「ひゃあ！？や、やめてへ～。も、もう気持ひわうひ～、ゆるひへ～。おへひゃい～。」
「許して、ください・・・っだ！」
「ふぁ、ふぁかったわよぉ。ゆるひて・・・くらひゃい・・・。―っ！な、なんれ止めへくれなのよぉ～！」
「お願いします習様がないっぞ！」
「ゆるひへ・・・ゆるひへくりゃはい・・・おれがいひまひゅ・・・ひゅ、ひゅうしゃま・・・。はへ～・・・」
勝った・・・！

「まあいいだろう。これくらいで勘弁してやるよ。」
う、振りすぎて頭が・・・。
「ふへ～。ぐりゅぐりゅ回ってりゅ～。」
「よしじゃあ準備するかな。」
朝っぱらから長い戦いの末俺は勝った。頭の痛みと引き換えに。
俺は朝ごはんを食べ髪をセットし、勉強道具も確認した。完璧だ。
「よし、行くか―っは！」
意味のわからん光景が・・・。
二人の女の子が自分の衣服を脱ぎ始めていた！
てかいつから出てたんだ！
二人は制服をまじまじと眺めていた。二人とも考え込んでいる。しかし裸で！二人とも下着を着けていなかった！元々露出の多い服だったが今のとそれとは話がまったく違う！二人はどうやら制服の着方で悩んでいるらしい。俺はなるべくそっちのほうを見ないようにしている。俺はそんな欲望なんかに負けない！俺は靴紐を縛っては解き縛っては解き、なんどやったかも忘れるくらい繰り返した。
「ルイ姉ぇ？やっぱり人間のものは人間に聞いたほうがいいですよー」
「やっぱりそうでしょうね。やはり真葉様にお教えいただかねばいきませんね。」
え・・・。

え・・・？

え・・・！？

来ないで下さい・・・！お願いします・・・！
「真葉様、制服の着方が分からないのですが・・・。どう着ればいいのでしょう？」
「・・・ん？あ、ああ、ま、まずはし、下着をつけろ。」

来ちゃいましたー！
・・・しょうがない、覚悟を決めろ俺！
俺は前を向いたまま部屋を鮮明に思い出しながら指示した。
「シタギとはどれのことでしょう？」
「え、えーとだな・・・。・・・・！」
（うちに下着があるわけねーだろぉ！）
「え、えとその紺の袖が長いやつだ！」
「あ、これですね。んっ・・・ちょっときついですね。」
それはしょうがない内着はぴったりとした布で出来ている。
「じゃ、じゃあ次にスカートをはいてくれ。」
「スカートとはどれでしょう？」
「難しいことを言うな・・・。えー・・・一方の穴が小さくてもう一歩が大きく開いているやつだ。」
「わかりました。小さいほうからでいいんですか？」
「ああいいぞ。」
「それで次はどれでしょう。まだひょろひょろとしたもののワンセットと、もう一着着るものがありますが。」
「そのひょろひょろしたやつはソックスだ。まあ物まで覚えなくてもいいだろ。それを右と左の足に履いてくれ。」
「はあ、・・・長いですね、んしょ。太ももの上部まではありますよ。はい、できました」
「そしたら上にさっき言ってた着れるやつがあるっているのを着てくれ。それがないと非常にまずい・・・。」
おまえらは特にな・・・。
「出来ました。・・・おお、どうでしょう真葉様。お似合いでしょうか。」
俺はもういいだろうと思い振り向く。
「おおいいじゃないか。似合ってるな。サンはどう―ぶっ！」
「これなかなか着れないぞぉ？きつすぎじゃないか？ん～っっしょ！はぁ・・・やっと入った。えー・・・と次はスカートとかゆうや

つだったっけか？」
なんでまだ着替え中なんだよ・・・！それもまだ初期段階じゃねえか！
「？どうかしましたか？真葉様。」
「え〝ぇー？なにがー？べづになんでもないぞぉ？」
冷や汗が滝のように！
そしてやっとサンの着替えが終わったようだ。
「どうだ？どうだ？似合ってるか習。うはは。」
「うん」
「な、なんだよその感想は～！ルイ姉とは全然違うじゃんか！サンにも似合ってるよ～とか可愛いよ～とか言ってくれてもいいじゃんかぁ！」
「ん、ニアッテルヨ。カワイイヨ。」
「ムキ～むかつく～！もういいもんな！ぷいっ。」
「うふふふ、だいぶ心通できてきたようですね。よかったです。」
「む～別に仲良くなってなんてないー。」
「そうだ。こんなやつと仲良くなったつもりはない。」
「「ふん」」
「息ぴったりではありませんか。ケンカするほど仲がいいとはこのことですね。うふふ」
「ムキ～、ルイ姉の意地悪ー！」
「でも気になったんだけどよ、なんでお前ら学校行くんだよ。別に大学に行くわけでもあるまいし。」
「はぁ～？ダイガクゥ～？そんなものには興味ないって。最初に言ったでしょ、破壊するって。」
「私は再生しますが。」
「だからそれはどういう意味なんだよ。」
「え？この世界に破壊って言葉なかったかな～、まあ少しだけ説明してあげるけど。簡単に言うと学校をドッカーン！とサンのこのハンマーでコナゴナにしちゃうってこと！楽しみぃ！うはははは

ー！」
またまた・・・意味が分かりません。
「意味が分からないという顔をしてますね。まあ付け足して言うとこうですよ。サンが学校を破壊します。それを私が再生させる。それだけです。」
「へぇー・・・なんでそんなことを・・・？」
「そっりゃあ暇潰し！アーンドストレス発散！」
「そうです。」
「それだけ！？それだけで学校粉々！？だめだめ！絶対だめだから！」
「えー、いいじゃん別にルイ姉が再生させて元通りになるんだからぁ。」
「はい。私のリプレイは完璧です。魔界一ともいっていいでしょう。」
「そういうことはどーでもいいの！もしみんなの前で学校壊したらパニックになるだろうし、俺はこの学校をなんの騒ぎもなく過ごしたいんだ！最近お前達のせいでそれは薄れてたけど今は出来てる！だから邪魔すんな！」
「そんなこと言われたってぇ、ねえ。」
「そうですね。これはしょうがないことです。だって私たちは。」
「「悪魔」」「なんだから」「なんですから」
だめだ・・・こいつらに何言っても・・・。さすが悪魔・・・最悪なやつらだな・・・。
「ねえねえ、こんな事話してるけどいいのー？学校。」
「あっ！やべぇ！はやくお前ら靴履け！遅刻するぞ！おいさっさと―ぶうっ！！」
ルイは普通に立ちながら靴を履いているが、サンはお尻を床につけながら思いっきり足を開いて靴を履いているため丸見えなのだ！これはどう考えてもやばい・・・！もしこいつが学校行ってみろ。学校でもこんなことしたら変なやつらが群がってくる・・・！どう考

えたって危険だ。それにルイだって下着はつけていない！ルイの場合は胸がなかなかあるのでこっちでも危ないだろう・・・。まったく、世話がやける・・・。やけすぎる！
「はぁ・・・。ちょっと待てお前ら。」
「よっしゃっと履けたぞぉ。うはは。ってどうしたんだよ。」
「どうかなさいましたか真葉様。」
「今日は学校は行かない。」
「え〝ー！？なんでー！？学校行こうよー！何で行かないのー！結構楽しみにしてたのにーいーいーいー！」
「な、なぜそういう決断をされたのでしょう。」
「おまえらはな、人間の女性には必要なものをまだ身に付けていないんだよ。それをつけなければ学校へは行けないんだ。」
「じゃ、じゃあはやくそれつけようよ！はやく学校行きたいんだよぉー！」
「まあ待てって。それは女性しか身に付けないんだよ、だから俺は持ってない。なかったらどうするか、そう、買いに行かなければならない。だから俺たちは学校へは行かずそれを買いに行く。わかったか？」
「うんうん！わかった、わかったからはやくそれ買いに行こうよ。」
「そうです、はやく私も学校に行ってみたいです。」
「まだ行かない。」
「もう、なんでだよーー！！」
「今行ったら生徒達に見つかる。だから登校時間が終わったらだ。」
「ぶーぶー・・・ぶーぶー・・・」
「私はすこし残念です・・・。今日のこの気持ちをどうすればよいのか・・・。」
「大袈裟だなぁ・・・。学校なんて明日でも行けるって、我慢しろよ。それに俺はお前達のためを思ってわざわざ休んでやるんだから、ほんとは感謝して欲しいくらいなんだぞ。ほんと・・・」
「ん・・・ありがと。」

「ありがとうございます。」
「あ、ああ・・・」
サンもルイもほんとに学校に行きたかったというのが分かる。でももうちょっと我慢してもらおう。
お、そろそろ時間か？今は８時５分あたり。まあいいだろう。
「よし、じゃあ行くか。ルン、サン。この機会にいろいろ見てみろよ。結構楽しいもん見つかるかもしれないぞ？」
「ほんと？楽しいものある？」
「あるぞ。」
「じゃあじゃあ美味しいものはー？」
「あるある。」
「うはー！は、早くいこっ！早く早く！その女性が付けるの買って、美味しいものいっぱい食べよー！うはぁ～・・・」
「お・・・」
不覚にもちょっとサンが可愛く見えた。と、そのときサンは左腕に絡んできた。きっとさっきまでのことは忘れているんだろう。でも嬉しそうでなによりだ。
「私もなんだか楽しくなってきました。私も美味しいもの食べたいです、真葉様！うふふ」
ルイは右腕に絡んできた。なにかが二の腕あたりにあたってる・・・。でもルイもいままで見たこともないような笑顔だった。
「よし、行くか！あ、一応かばん持っとけ、いい入れ物だからな。」
「「はーい」」

ほんとに楽しみなんだな・・・よしっ。
「じゃあ今日はすこしだけサービスしてやるからな、楽しめよ？出発！」
「やったーしゅっぱーつ！。うはは！」「うふふ！」
俺は学校を破壊して再生させというデタラメなやつらということを

忘れて、とても楽しそうな二人の女の子悪魔に挟まれながら家を出た。

4騒目：理騒（後書き）

今回は少し悪魔と人間の仲を縮めるようにかいてみました。これからどんどんこの仲が良くなっていくのか悪くなっていくのかは是非これからもこの作品を読んでくれればいいとおもいます

5騒目：平騒

「ちゃんと中の人に聞くんだぞ？サイズ合うの探してるんですがって言うんだ。わかったよな？さあ行ってこい！」
・・・じとー。
「ど、どうした二人とも。」
「習はいかないの？」
「あ、当たり前だろ！」
「なぜでしょう・・・」
なぜでしょうって・・・そりゃ・・・。
「こ、ここはな男は入れないんだ。だから俺は外で待ってるしかないんだ。・・・よしっ完璧だ！」
「ふーん、じゃあしょうがないのかぁ。よぉしっ、じゃあチャチャっと行っちゃおうルイ姉。」
「わかりました。では行きましょうか。」
ウィーン・・・
二人は入っていった。ランジェリーショップに。
「よ、よかった・・・、一緒にーとか言われたときどうすりゃいいかと思ったが・・・。なんとかいった。・・・ふぅ。」

ここは朝昼晩いつでも賑わっている俺のいる町で一番愉快なところだ。ここには大体のものはそろっているし、遊園地などもある。ここにいれば暇はしないだろう。しかしここに来るまでの二人の好奇心といえばすごいものだった。目に入ったものをそのまま口に出したり指をさしたり。おれはそれに一回一回答える。もちろんあいつらが納得するように説明するのだから大変だ。その繰り返しをここにくるまで永遠と・・・。朝から疲れたぞ・・・一日もつのかこのペースで。いやもたせなければ無理やりでもつりまわさせられるだろう。それなら自分で決めて歩いたほうが全然いいだろう。・・・

それにしても遅い。もう1時間は経ってるんじゃないのか？あ、いや、女性の下着選びはこういうものなのかもしれん。まあゆっくり待っていよう。
３０分・・・1時間・・・1時間３０分・・・2時間・・・2時間半・・・3時間・・・んっ・・・。
おかしいだろ。絶対おかしい！なんで3時間もかかるんだ！？もう昼だぞ！？腹は減ってきたしあいつらのことで不安が頭を埋め尽くす。それでさらに腹が減る。・・・いくか。
ウィーン・・・
「こ、これは刺激が強すぎる・・・！」
はやくあいつらのところに―っ？サンの声か？
「い～やだ～！もっとかわいいのがいい～！」
「も、申し訳ありません・・・。お客様のサイズではこれしかなくて・・・。」
「サン上も下もこんな真っ白やだぁ！ルイ姉みたいのがいいー！」
「こ、こらサン・・・！わがまま言ってはだめです。ここではここのルールに従いましょう。あとで私がいろいろやってあげますから。それで妥協してください。ね？」
「ぶーぶー・・・ぶーぶ・・・わかった・・・。」
「ふぅ・・・。」
「・・・俺が行くまでもないな。」
俺はすぐに店を出た。俺が出てから5分後くらいには二人は出てきた。
「なんか納得いかない～。ルイ姉はあんなかわいいの買ってさぁ？サンはこんな・・・ブツブツ・・・」
「真葉様お気になさらずに。それと下着のほうはすでに着用してますので。」
「おうわかった。ほれサン美味しいもん食いに行くんだろ？もう昼だし腹も減ってきた。最高のコンディションだぞ。」
「うん・・・。なに食べるの？ほんとに美味しい？」

「いつも俺が友達と行くところがある。そこに行こう。なんでもあるし味は保障する。お金は・・・まあ大丈夫だろ。」
「さあ行くぞぉ！遅れるなぁ！うははー！」
サンは声を上げて歩き出す。その店とは逆方向に。
「なんだあいつ・・・。おーいサン。こっちだ。」
「う、うははは！さあ行くぞー！うははー！」
「もう機嫌が直ったようですね。よかったです。」
おれの隣にいたルイが呟いた。
「そうだな」
俺も呟いた。
「俺たちも行こうぜ、あいつ目ぇ離したら絶対迷子になるだろうからな。」
「そうですね。くすくす。行きましょう。」
俺とルイはサンを追いかけた

5騒目：平騒（後書き）

今回は時間がなく短いです。失礼

6騒目：食騒

「うへぁ～～～～！この世界にはこんなに美味しそうなものがある
の～！？ねぇ！なんでも食べていいの～？いっや～迷っちゃうなぁ。
」
「まあなんでも頼めよ。お前らがそこそこ食べたとしてもそんなに
金はかからないだろうからな。」
「いやったー！ルイ姉は何食べる？何食べる！？」
「そうですねぇ、私は・・・あ、このえーっと・・・ナ、ナポリタ
ンというものに興味があります。はぁ・・・なんとか読めました。」
そう、ここは一般的にファミレスというところだ。別にここはそん
なに特別な思いいれはないが理由は単に、近かった。
「じゃあ私はこの！えー・・・とぉ、ルイ姉読んで！」
「えと、うっ、長いですね。う、うるとらすーぱー・・・で、でり
しゃすぐれーとあいあん・・・すてーき・・・。なんですかこれは・
・・！とてつもなく大きいですが。食べられるのですか？」
「らくしょうらくしょう！こんなの腹の足しにもならないでしょ。・
・・それよりルイ姉は食べないんだね。いつもならあんなに食べる
の―んグ！？」
ルイはサンの口を手で覆った。なんなんだ・・・
「お、お気になさらず真葉様・・・！う、うふふふ！そ、そんなこ
とよりはやく頼みましょう。」
「そうだな。お、ちょうどいいところに。スイマセーン、注文お願
いしますー。」
一人店員が向かってきた
「んとじゃあ俺は野菜サンドとコーヒーで。あとナポリタンと？え、
えーと・・・ウルトラスーパーデリシャスグレートアイアンステー
キを一つください。これでおねがいします」
（ほんとにでかいんだが！）

「おいサンほんとに食えんのか？これなかなかでかいぞ？残すなよ？」
「大丈夫だってば・・・こんなの全然だって！」
「そうですね、こんなのぜんぜ―こ、こんな量は食べれませんよ！」
「ルイ・・・お前は・・・」
「ルイ姉？無理はしちゃぁ、いけないよ。」
「だ、大丈夫です・・・」
そうこうしているうちに俺たちの頼んだりょっ―料理？訂正しようか。サンの頼んだ巨大戦艦が俺たちのテーブルに乗せられた。
ずうぅぅん！！
な、なんでステーキが巨大戦艦に見えるんだ・・・！
「うわひゃあ！すっご～い、じゃ、いっただきまーす！んが～」
ぐわっ！
「あん！？」
いままで俺たちのテーブルの半分を独占していたステーキが消えた・・・跡形もなく。あるのは皿のみ。その皿もピカピカだ・・・どゆこと！？
「ふえ！？ステーキは～！？消えちゃったよー！どこどこ！ステーキどこー！？」
サンはステーキを探す。いたるところを。
「こらサン。行儀が悪いですよ？座ってなさい。」
「だって私のステーキがぁ！・・・じとぉ」
「ど、どうしたサン。」
サンの見つめる先にはルイの口が・・・ん？なんかついてるぞ？ソースか？なんのソース・・・そ、そういうことですかー！
「な、何ですかサン？私のの顔に何かついてますか？」
「うん。」
「え！？ん・・・あ、美味しい―っは！しまった・・・」
この悪魔もアホでした。
「んもぉー！！なんでルイ姉がステーキ食べるのーー！！あれはサ

ンのス・テ・エ・キー！！」
「す、すいません・・・ものすごくおいしそうだったもので・・・」
「サンまだ一口も食べてないー！うは～～ん！・・・ぶーぶー、ぶーぶー」
でた！いじけモード！
「だ、大丈夫だサン。別にまた頼めばいいんだ。スイマセーン！え、えーとなんとかかんとかステーキくださーい！」
「その商品は一日一食限りでーす。すいませーん」
なにぃ！？
「ブーブー。ブーブー。サンハステーキタベラレナインダ。ブーブーブーブー。」
サンが壊れた！
「おいルイ！しょうがねえからなんだったけ・・・えーとリプレイで再生させろ！お前ならできるだろ！」
「い、いえ・・・あれは元の物がなければ・・・私が食べてしまいましたし・・・。すいません。」
おわったー！
「えへへ、サンね？ステーキ食べたんだよ？とっても美味しかったよ？うへへーへへー？」
だれかと話してるー！
「お、おいサン別にステーキじゃなくてもいいだろ！しょうがないから他のもの食え。な？」
「うーん、ワカッター、ナニニショウカナ。ジャーコノ『カクザトウ』ッテノニシヨー。オイシソウダナー。」
「それ違うからな！？コーヒーの合わせだそれ！ほらもっとあるぞ角砂糖意外な！」
「オマカセー。」
「わ、わかったおまかせな？じゃあ二人で同じモン食えな？ナポリタン頼むぞ。」
そして俺は店員にナポリタンを頼んだ。

「おまたせしましたー、ナポリタン二つと野菜サンドでーす。」
「よ、よしじゃあ食うか！いっただっきーます」
「いただきます。」
「イタダキマス。」
「んーうまいな。この野菜サンドは。ルイはどうだ？って早！」
もう食い終わってやがる！それも始から何もなかったかのように座っている！とその横ではちびちび一本ずつナポリタンを食べるサン。な、なんて悲しい光景・・・！
「う、うまいか？」
「ウン、ウマイヨ。コノホソイノウマイ。ンガガガー。」
こ、壊れたー！完全に！
数分経つとサンも俺も食い終わり一応は満足した。ルイは微妙な顔をしていた。
「よしさっさと出て遊びに行くぞ。」
「そうですね。」
「ソダネ。」
俺は会計をするためレジに行った。
「えーお会計、５万４百円です。」
「ぷっ」
俺は思いっきりぶっ倒れた。
「ご、５万！？全然食ってないの・・・あれか・・・。あの数秒でなくなったステーキ・・・。こんなにしたのか・・・誤算だった！チャリーン
「ありがとうございましたー。」
「はぁ・・・出費がやべー。ほんとにもつのかこの調子で・・・ぐう」
おれは外で待っている二人のところにいった。
ちくしょー・・・

6騒目：食騒（後書き）

またまた短くしてしまいました
あしからず

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2900g/

Break or Replay the School

2010年10月21日07時00分発行